

## 【研究ノート】

姑獲鳥とウブメのあいだ<sup>(1)</sup>

— 凶鳥・産死者・産鬼傳説の系譜 —

## 一

京極夏彦の人氣シリーズ「京極堂シリーズ」第一作にして彼のデビュー作となった長編小説『姑獲鳥の夏』<sup>(1)</sup>によって、より廣く認知された姑獲鳥であるが、その傳承が中國に由來する姑獲鳥傳説と日本のウブメ（産女）傳説とが習合したと考えられていることは、辭典・事典の類でも容易に確認される事柄である。<sup>(2)</sup>

今日、我が國で語り伝えられるウブメ傳説は、

お産で死んだ女性の變化で、夜道や川邊で通りかかる人に、自分の赤ん坊を抱かせる

と言うパターンを基本形としつつも、様々なバリエーションを

生みながら全国各地に傳承されている。

姑獲鳥の名は、晉の郭璞（二七六―三二四年）編と伝えられる『玄中記』<sup>(3)</sup>に、

## 増 子 和 男

- ① 夜に飛び、晝かくれる。
- ② 羽毛を着ると鳥に變身し、羽毛を脱ぐと女の姿になる。
- ③ 一名、天帝少女、夜行游女、また一名鉤星（『太平御覽』卷八八三に「鈞星」、又の一名は隱飛。
- ④ 喜んで人の子を取って養い、我が子とする。
- ⑤ 子供の衣は夜に外に出してはならない。（姑獲鳥は）血をそれに垂らして目印とし、その子供を取るのである。
- ⑥ 荊州（今日の湖北省）に多く居る。
- ⑦ （凶鳥である）鬼車と同類である。<sup>(4)</sup>

とあり、その記述の後に、東晉・干寶『搜神記』卷一四「毛衣女」とほぼ同文の、日本でも良く知られる「羽衣傳説」が付け加えられている。

## 二

更に唐・段成式『酉陽雜俎』では、

- ① 胸に乳房がある
- ② 子供の衣に羽毛を落として、その子にたたる。
- ③ この鳥はお産で亡くなった人がなる——或言死者所化（波線は増子）。

と言う傳承が付加され（卷一六「廣動植之一」羽篇鳥類）、出産に際して亡くなった母親の無念がこの世を彷徨うと言う「産死者」或いは「産鬼」と呼ばれる傳説と習合して、その後更に様々な要素が付け加えられるに至る。<sup>(5)</sup>

姑獲鳥傳説については、袁珂『中國神話傳説』上「開闢篇」第八章（中國民間文藝出版社、一九八四年）、同『中國神話大詞典』（上海辭書出版社、一九八五年）の考證があり、山田慶兒『夜鳴く鳥——醫學・呪術・傳説』（岩波書店、一九九〇年）では、この傳説の生成と發展を詳細に考察して、非常に参考となる。一方、「産死者・産鬼傳説」については、『搜神記』卷一六に、

姑獲鳥とウブメのあいだ（増子）

○ 諸仲務と言う人に娘があったが、嫁いで實家でお産をしたが亡くなった。當時、産死した人の顔には墨で斑點をつけて葬るという習慣があった。母親は娘を可哀想に思っそれをしなかったが、仲務はこっそり娘の顔に墨で斑點をつけて埋葬した。その後、亡き娘が夫の夢枕に立ったが、眞っ白な白粉の上に黒い斑點があった。

とあり、この習俗の背景を考える上で、澤田瑞穂「墓中育児譚」に、

○ 出産前に亡くなった人は、子を生み出せなかったことを恨んで、「産鬼」となると考えられていたので、腹を割いて子を取り出し、同じ棺に入れて埋葬する習慣が南北朝以來あった。<sup>(6)</sup>

とする指摘は見逃しがたい。この邊りが右に示した『酉陽雜俎』に見えるような、姑獲鳥の屬性に「産鬼」の要素が付け加わった情報源でもあったと思われるからである。

從來の姑獲鳥傳説の考察では、怪鳥・姑獲鳥についての考證から、多少中國の「産鬼」傳説について觸れはしても、具體的な例を缺いたまま、日本の産女傳説と結びつける傾向がある。この點を中心に後日拙論で掘り下げることとしたい。

先ず手始めに着手すべきは、姑獲鳥傳説に先行する、凶鳥傳説の從來の諸説の整理と検討からと言ふこととなるうか。

## 【注】

(1) 講談社ノベルス、一九九四年。

(2) 國語辭典や百科事典だけでなく、最近の『妖怪ブーム』のいわば追い風を受けてか、姑獲鳥關連の著作が数多く見られるようになった。就中、多田克己『百鬼解讀』（講談社文庫、二〇〇六年。初出は、講談社ノベルス、一九九九年）、村上健司『妖怪事典』（毎日新聞社、二〇〇〇年）、木場貴俊『歴史的産物としての『妖怪』ウブメを中心にして』（小松和彦編『妖怪文化の傳統と創造』、せりか書房、二〇一〇年）、更に同氏擔當執筆の小松和彦監修『日本怪異妖怪大事典』『うぶめ』の項（東京堂出版、二〇一三年）などが詳細に考證して参考となる。

(3) 魯迅『古小説鈎沈』（魯迅先生記念委員會編、人民文學出版社、一九五一年）所收。なお、『玄中記』は長い間散逸していたが、後に『說郛』卷四『墨裏娥漫錄』などが諸書に残された逸文を集めている。『隋書』經籍志、『舊唐書』經籍志、『新唐書』經籍志共にその名を見ず、『崇文總目』地理類に本書の名が記載されるが、撰者の名は記さず、その後の諸書に『郭氏玄中記』と記すものが散見するようになる。李劍國は、南宋・羅泌『路上揮發』卷二「論梓槃瓠之

妄」の説を支持し、郭氏とは郭璞であると結論する。詳細は、『修訂本 唐前志怪小説輯釋』（上海古籍出版社、二〇一一年）を参照。

(4) 『太平御覽』卷九二七に九頭の鳥と見える。

(5) 唐・段公路（段成式の甥）の『北戸錄』卷一では更に「好んで人の子を取りて食らふ」として、禍々しい怪鳥振りをより強調する。

(6) 『修訂 鬼趣談義』（平河出版、一九九〇年）所收。同論文は、亡くなった妊婦が墓中で出産し、子を育てるために餅（飴）を夜ごと買いに來たという「子育て幽霊」の中國での在り方を、博引旁證して考證したものであり、この方面の考察をする上での必讀の論考である。しかしながら、姑獲鳥の論考で本書を引く例は殆ど見當たらぬ。